

南蠻貿易概観 (一)

門 脇 逸 司

一

普通に南蠻時代と云ふのは、ポルトガル人が渡來して貿易を初めた頃から、其の渡來を嚴禁した、寛永十六年（一、六三九）頃迄の約百年間を指すのであるが、此時代に我國に渡來して貿易關係を結んで居た歐洲人はポルトガル、スペイン、フランス、イギリス四ヶ國の商人達であつた。ポルトガル人は其期間を通じて、スペイン人は約三十年間、イギリス人は約十年間貿易に従事した丈で、鎖國令と共に、或ひは其以前に何れも我國市場との交渉を絶つに到つたが、フランス人は鎖國政策遂行後も長く長崎港内出島に殘留して歐洲文化の唯一の紹介者となつた。歐洲人以外の外國人で我國の市場に出入したものに隣邦支那があつたが、フランスと並んで鎖國後に於ても貿易國としての特典を與へられて居た。

支那との外交關係は遠く上古に始る譯であるが、南蠻人が來朝する様に成つた頃に我國に來て貿易して居た支那商人は極く稀であつて、小さな舟で九州沿海に現はれることはあつたが、貿易上重大な意義を持つたものではなかつた。慶長年代（一、五九六—一、六一五）に這入つてから初めて貿易船も多くなり、阿久根、博多、府内、五島、大村、平戸及び長崎等の諸港で交易し、慶長十二年（一、六〇七）に支那福建省の泉州府の商人が薩摩に來航して以來は、主として其方面の諸港を中心に貿易して居た様である（註一）。元和二年（一、六一六）六月になつて國主島津家久は幕府の政策に迎合して、以後支那船の貿易は長崎に於て行はるべき旨を達して居り（註二）、寛永十二年（一、六三五）以降は幕府自身で長崎一港に限る旨の法制を出した（註三）ので、其以後は再び他の諸港へ入港することはなくなつて居る。此年から引續いて鎖國時代に於ても、和蘭と相並んで長崎貿易否我國對外貿易の獨占者と成つたのである。

外國人として日本市場に直接顯はれて貿易したものは以上の五ヶ國であつたが、此時代は倭寇の後をうけた我國人の海外雄飛時代であつて、外國人の來たるを待たずに海外に船を出して貿易して居たものも少くなつた。天正年中（一、五七三—一、五九二）に出帆して呂宋に向ひ文祿三年（一、五九四）歸朝した堺の商人納屋助左工門が南洋貿易に従事した最初の邦人であると稱へられて居る。此種商人の海賊たらざる事を明かにして對外信用を高め、貿易を保護獎勵せんが爲めに設けられたものが貿易特許狀制度であつて、秀吉は文祿元年（一、五九二）に初めて「一自日本到〇〇國舟也」と記した奉書を與へることにした。此特許狀を與へられた所

謂奉書船は長崎の末次平藏（二艘）、舟本彌平次（壹艘）、荒木宗右工門（壹艘）、糸屋隨右工門（壹艘）、堺の伊豫屋某（壹艘）、京都の茶屋四郎次郎（壹艘）、角倉了以（壹艘）及び伏見屋某（壹艘）の八人九艘に過ぎなかつた。（註四）

徳川時代になつて外國貿易は益々盛んになつて來たのであるが、家康は此制度を受けて、本多佐渡守正純を此係に任じて、京都相國寺の豐光寺承兌、圓光寺元佶、南禪寺の金地院崇傳等に相次いで朱印狀事務をとらして居た。是等の寺院にのこされた、慶長九年（一、六〇四）から十六年（一、六一一）迄承兌、元佶の取扱つた朱印狀を掲げた異國御朱印帳、及び同十七年から元和二年（一、六一六）迄に崇傳の取扱つたものを掲げた異國渡海御朱印帳等を見れば當時の事情が明かになる譯である。此十三年間に交付せられたものは次の通りで合計百九十八艘である。

慶長九年	尼崎屋又次郎外二十五人	三十艘
同 十年	尼崎屋又次郎外二十五人	三十六艘
同 十一年	高橋掃部入道外十四人	十七艘
同 十二年	鍋島加賀守外十七人	二十艘
同 十三年	角倉了以外三人	六艘
同 十四年	明人林五官外十人	十二艘

同	十五年	大村丹後守内江島吉右工門外六人	八艘
同	十六年	角倉了以外五人	六艘
同	十七年	茶屋四郎次郎晴次外三人	六艘
同	十八年	角倉了以外十二人	十八艘
同	十九年	唐人三官以下十四人	十七艘
元和元年		唐人八官外十四人	十六艘
同	二年	唐人八官外四人	六艘

右の朱印狀を受けた者の中で三官（十二通）、角倉了以（九通）、木屋孫左工門（八通）、平野孫左工門（七通）五官（七通）等の様に何通も貰つた人が可成りあつたが、又中には一通丈しか貰はぬ人も無論多かつた。朱印狀を交付せられた人々は全部で七十五人であつて、其の内に外國人として支那人五名、琉球人一名、及び西洋人が十五名含まれて居るので、日本人で朱印船を出したものは五十四人あつた譯である。日本人の大部分は商人であつたけれども、有馬修理大夫（七通）、島津陸奥守（七通）、松浦法印（六通）、加藤肥後守（三通）、龜井武藏守（三通）、鍋島加賀守（二通）、五島淡路守（二通）、山口駿河守（一通）、鍋島信濃守（一通）、長岡越中守（一通）等の大名も可成りある。又長谷川權六、同左兵工等の役人や、家康の妾夏の局だとか云ふ風に幕府關係の人々も六七人はあつた。

此等の人々の舟は主として安南（十八艘）、占城（三艘）、呂宋（三十一艘）、信州（二艘）、シヤム（三十六艘）、東京（十艘）、太泥（七艘）、順化（一艘）、西洋（二十二艘）、東埔塞（二十四艘）、迦知安（一艘）、密西耶（二艘）、艾萊（二艘）、田彈（二艘）、麻利加（二艘）、交趾（二十八艘）、昆那宇島（一艘）、廣南（一艘）、高砂（二艘）等の南支、南洋、印度方面に出かけたものである。此れは前述の如く僅かに十三ヶ年間に於る朱印船の状態であるけれども、此文でも當時の我國人の海外發展熱の如何に旺盛であつたかを知る參考資料として充分である。

尙此外に當時の外國貿易として數へらるべきものに、嘉吉三年（一、四四五）以來殆んど打續いて對馬の國主宗氏の手で取扱はれて居た朝鮮歲遣船貿易がある。秀吉の征韓の後以來暫く交渉はたゞれたけれども、慶長十二年（一、六〇七）五月に朝鮮使節が來朝してから、再び翌年から歲遣船が初められた（註五）から、此れをも併せて南蠻貿易時代の我對外關係は可成り廣汎に亙つて居り、外交關係も亦従つて當時としては複雑多岐に亙つたことと思はれる。次に項を改めて當時我國に渡來した歐洲諸國との關係について大觀することにしやう。

（註一） 通航一覽、卷百九十八。

（註二） 大日本史料 第十二編之二十五、二三一頁。

（註三） 通航一覽、同上。

(註四) 横井時冬、日本商業史 百七頁。

(註五) 大日本史料 第十二編之四、自八九一頁、至九一五頁。自九三四頁、至九四五頁。

二

中世に於ける歐洲人の世界は地中海を中心とした一少部分に限られたものであつて、ローマが其中央に位して居るのだと信じて居た。鬼の住家であるとのみ考へて居た東洋へ十字軍遠征を試みた歐洲人達は、殺すつもの鬼から紳士となることを教へられたのが故國への最大の土産であつた。磁石の使用法、天文の觀測術、及び航海技術等の海外貿易上に欠くべからざる學問技術もアラビア人が心をこめたる贈り物の一つである。豊富なる金銀鑛山を國內にもつて居るか、さもなくば更に進んで貿易を興して輸出を奨勵し、輸入を節して其差額を金銀で自國に持込むことが、自然經濟より貨幣經濟に進む過渡期にあつた歐洲諸國を風靡した國富策であつた。此時代に於て特に海外貿易の必要なる所以を痛感したのは南歐の一小國ポルトガルであつて、時の攝政ヘンリー航海親王 Henry the Navigator はアラビヤに導かれて東洋貿易を興すことが自國を發展せしめる唯一の途なりと確く信じて居た。國內に天文觀測場を設けたり、航海學校を建て、更に探險船を派遣して新航路の發見に力めて居た。

努力のむくひられるときが終に來た。同國の一寒村シネス Sines に生れたバスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama

の喜望峯 Cape of Good Hope を迂廻する印度航路の發見が即ち之である。ポルトガル國王エマニユエル Emmanuel の命令で三隻の帆船を熾して、乗組員百六十名に餘る印度派遣隊を率ゐて首府リスボンを出たのは千四百九十七年（明應六年）の六月八日であつた。一行は無事喜望峯を廻つてアフリカの東岸に出で、メリンダ Melinda に上陸して、翌年の五月十九日に印度のカリカット Calicut 附近へ上陸することが出来た。此れを機會にポルトガルの東洋進出は極めて敏速に行はれて、カルカッタ Calcutta（一、五〇〇）、アンゴラ Angola（一、五〇〇）、アフリカのザンジバル Zanzibar（一、五〇二）、コーチン Cochin（一、五〇三）、モザンビーク Mozambique（一、五〇六）、ソコトラ Sokotra（一、五〇七）、スマトラ Sumatra（一、五〇九）、ゴア Goa（一、五一〇）、マラッカ Malacca（一、五一一）等を順次自己の手中におさめて、千五百三十七年（天文六年）には支那のマカオ Macao に進出して、東洋貿易の中心地に定めると云ふ風に各地の經略に餘念なき有様であつた（註六）。ポルトガル人の東洋への進出が行はれた當初に於ける歐亞の通商は、小アジアより隊商の手によつて印度に出づる經路をとつて行はれて居たが、此等アラビヤ人の四大貿易中心地たるオルムヅ Ormuz、アデン Aden、カリカット、マラッカを略取してマラッカに定住地を設け、東洋貿易を獨占したことは、ポルトガル遠征隊の擧げえた大なる收穫であつたと言ふべきである。

日本を發見した歐洲人の先驅者として、ポルトガル人が我國土に足を踏み入れたのは、極めて偶然な機會からである。ムルドック Murdock はアントニヲ・ガルヴァオ Antonio Galvão の記録を掲げて次の如くに説明を試

みて居る。(註七)

[But as Galvão's book "Dos varios descubrimientos" proves, it was only in 1542 that an acquaintance with the islands of Japan themselves was obtained, . . . , Antonio da Motta, Francisco Zeimoto, and Antonio Pexotto went in junco from Siam to China, when a great tempest called Tufao (from the chinese Taifum, or the Japanese Tai-fu, great wind) drove their junco four twenty four hours on the open sea, and brought them among the islands of Japan; they landed one of those islands, called Tanegashima, in the sea of Satsuma.]

我國へ漂着した年代は千五百四十二年(天文十一年)であり、漂着した場所は種子ヶ島であつたとかれて居るが、異説も勿論存在して居る譯である。年代について、人名について、更に其の地點について諸種の見方が行はれて居る。(註八)

平井希昌氏の歐南遣使考に見える所は、

「西洋人の我國に來る者は、蓋し葡萄牙人を始とす、天文十一年に在て其國船風に遭つて豊後神宮寺浦に漂着し、珍寶及銃砲を以て國主大友宗麟に遣り互市を請ふ、宗麟大いに喜んで之を許す、後二年六大船に駕して來り珍寶を餽遺す、宗麟厚く之を酬ひ、麾下齋藤源助をして其國に至て答禮せしむ病で死す、其墓今尙國都に存すと、是より毎歲互市絶えず」

とあり、又鐵砲記に、

「隅州之南有一島、去州一十八里、名曰種子我祖世々居焉、天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦着大船、不知自何國來、船客百餘人其形不類、其語不通、見者以爲奇怪矣、其內有明大儒生一名五峯者、今不知詳其姓字、時西村主宰有織部亟、頗解文字偶遇五峯、以杖書於沙上云、船中之客不知何國人也、何其形之異哉、五峯即書曰、此是西南蠻種之賈胡也、織部又書曰、此去十又三里、有津、々名赤尾木、我所由賴之宗子、世々所居之地也、津口有數千戶、戶富家昌、而南商北賈往還如織、今雖繫船於此不若要津之深且不漣之愈也、告於我祖父惠時與老父時堯、即使扁艇數十拏之至、於二十七日己亥、入船於赤尾木津口、有僧忠首座者、手携一物、長二澤、其爲體也中通外直、而以重爲質、其中雖常通、其底要密塞、其傍有一穴、通火之路也、形無物之可比倫也、其爲也入妙藥於其中、添以小團鉛、先置小白於岸畔、親手一物、修其身眇其目、而自其一穴放火、則莫不立中、其發也、如擊雷之光、其鳴也如驚雷之轟、聞者莫不掩其耳、時堯見之、以爲稀世之珍矣、始不知其名、亦不詳其爲何用、旣而人、或名鐵砲者、不知明人之所名乎、抑不知我一島者之所名乎、一日時堯重譯謂二人蠻種曰、我非曰能之、願學焉、蠻種亦譯答曰、君若欲學之、我亦罄其蘊奧以告焉、時堯不言其價之高而難及、而求蠻種之二砲、以爲家珍矣、其妙藥之構飾和合之法、令小臣篠川小四郎之。」

と見えて居る。此等の史料を合せて考へれば種子島着のポルトガル商船は第二回目の渡來であり、其以前に於て所謂三人のポルトガル人が漂着したものと見ることが穩當であらふ。即ち天文十一年に神宮寺浦についたポルトガル人がマカヲに歸つた後、日本の存在を發表したので我國を訪れることに成り、其中の一船丈が種子島

に着いて、他の船は坊ノ津を経て豊後の神宮寺浦に向つたものではなからふか。

それは兎に角として、ポルトガル人の漂流に始まつた對葡貿易は、其後天文十八年七月二十二日（一、五四九、八、一五）の耶蘇會の闘將パードレ・メストレ Padre Mestre・フランシスコ・ザヴィエル Francisco Xavier の鹿兒島着以來天主教布教の發展と相俟つて、九州特に平戸長崎を中心とする所謂南蠻貿易時代を現出することに成つた譯である。當時ポルトガルの東洋に有する貿易上の勢力は絶大なものであつて、常に背後に強大な軍隊を擁し發見と同時に占有し、貿易を獨占する爲めにはあらゆる手段を講じて、ゴア政廳を中心として各地に滯留地を設けて、着々東洋の經綸を行つてゐたことは前に一言した通りである。ポルトガルの東洋貿易の中心地の主なるものは Mozambique, Socotra, Ormuz, Diu, Damann, Cochim, Ceylon, Negapatam, Malacca, Ternate, Macao の諸港及び Newfoundland, Brazil 等の多方面に互つて居り（註九）、首府リスボンは其等各地より集まる物産の集散場をなして居た。

（註六） Webster: General History of Commerce p. p. 115—117.

（註七） Murdock: Histories of Japan p. 33.

（註八） 菅菊太郎、日歐交通起原史 自一六一頁 至一八九頁。

（註九） Webster: Ibid p. p. 118—119.

初めて我國の存在を明かにして以來のポルトガル人は、貿易上の利益に着眼して、僅か四五年の間に毎年數隻の商船を派遣する様になつた程に重要視して居たらしい。貿易船としてのポルトガル船の最初數年の間に入港して居たのは鹿兒島、山川、坊ノ津、及び臼杵等の諸港(註一〇)であつたが、天文十八年(一、五四九)に來朝したザヴィエル *Xavier* が先づ鹿兒島に上陸して布教した事實から考へて、是等の商船は主として、南九州に出入してゐたものと思はれる。四周山をもつて圍まれた鹿兒島は大隅、薩摩等の中心市場ではあつたけれども、交通機關の不完全な當時としては、其の *Hinterland* が餘り貧弱であつて、數年間打ち續いて舶載せられた貨物の消化力なき點を見越した爲めか、或ひは布教上の政策によるか、恐く双方の理由によるものであらふが、天文十九年のポルトガル商船は鹿兒島を捨て、平戸へ入港(註一一)する様になつて居る。爾來永祿四年頃迄約十年間の平戸はポルトガル商人の獨占市場として、歐洲、印度、南洋、南支等の諸國の物産山積して、松浦候の貿易政策宜しきをえたることと、布教上の便宜が多かつた爲めに一大貿易市場を形成することに成つた。

平戸に於けるポルトガル貿易によつて内外人共に莫大な利益をおさめえたのであつたが、天主教を中心とする外交關係の圓滑を缺きがちであつて、終に永祿五年(一、五六二)に平戸に入港した商船は平戸をすて大村領にある横瀬浦に移ることになつた(註一二)。松浦法印が常に嫌教方針を維持して居たにかゝらず、大村の領主大村純忠は貿易の利益に着眼して、布教の自由を許した上に諸税を免除(註一三)して誘導したことが其

の原因の主なるものであらふ。貿易並に布教の中心は一時横瀬浦に移つた形であつて、大村候は屢々同地を訪れて教義を聞き、終には洗禮を受ける迄になり、有馬、大村等の領内に天主教の傳播したのも此當時に始るのである。大村候の所謂日本國中最大最美の港（註一四）である横瀬浦へポルトガル人が入港して貿易したのは前後二回丈であつて、永祿六年に領内の反天主教徒の手で此地が焼かれた爲めに、翌七年に來航した商船は止むなく平戸へ入港したが（註一五）。翌年からは大村領の福田浦へ來ることに成つた（註一六）。福田は港として不適當であると同時に、貿易市場としても不向であつた爲めに、其以後四五年の間は此處を中心にして良港を求めて居た様である。

ポルトガル人が最後に求めえた港は大村領内にある長崎であつて、同時に長崎は對葡貿易の行はれた最終の場所となつた譯である。長崎とポルトガル人との交渉は永祿十年（一、五六七）イルマン・ルイス・バルメイダの布教に始まつて、同十二年のバードレ・ガスパル・ヴィレラの布教とトドス・オス・サントス寺の建立が之に次ぎ、愈々貿易船の入港することになつたのは元龜元年（一、五七〇）のことである（註一七）。長崎は此から後約七十年の長い間ポルトガル貿易の市場となり、天主教布教の發動地となつて、一方に貿易上の利益を攝取すると共に他方教徒の數を増すことに成つた。日本西教史によれば（註一八）

「基督教師が、曾て土人及び居留の葡萄牙人を扶助する爲め長崎に始めて居所を定むる時に當りては戸數五百に充たざりしが、歐洲の船舶續來し商賣品を輸入せし以來、土地日に開け、繁榮月に益し、極めて便宜を

得、千五百九十年に於ては歐洲の船舶第三月より第六月まで停泊する際、各地より來往する商及び工人等を除き五千人の多きに及ぶ程増加せり。」

とあり、當時の状態をおぼろげながら推知することが出来る譯で、日増しに伸び行く長崎のすがたを彷彿たらしめるものがある。領主大村氏の疲護が長崎の繁榮に預かつて力のあることは勿論であつて、元龜二年に其の臣朝長對馬をして市街の地割を行はしめたり、或ひは長崎、茂木の地上權を耶蘇會に附與したり等、多大の便宜を與へて居る事實が之れを證明する譯である。長崎並に茂木の地上權が耶蘇會の手に歸したのは天正八年のことであり、浦上の地上權は天正十二三年（一、五八四—一、五八五）頃で、後者は有馬候の寄進によるものと云はれて居る（註一九）。先に永祿十一年（一、五六八）織田信長が京都四條坊門に南蠻寺を建てしめ、近江甲賀郡五百貫文の土地を寺領としたことと思ひ合せて、天主教の當時占めて居た地位が如何に大きいものであつたかをうかがひ知ることが出来る。

海の大日本史の著者は當時の耶蘇教について（註二〇）、

「西教我に入りて茲に至る僅かに三十餘年にして、日向大隅を除く九州一圓、京大阪、仙臺、加賀等所在寺院を設け、日本在留の宣教師三百餘人、寺院二百五十箇所、信徒三百萬餘人に達し、名門豪族の洗禮をうけ耶蘇名の印を用ゐ、十字架を家紋とするものあるに至り、全國に在て此教の行はれざる所僅に十四州。」

と述べて居るが三百萬人の信者は當時の總人口の七分の一に相當する譯であつて恐らく其五分にも達して居な

かつたことであらふ。耶蘇會の通信中に(註二一)「日本に於けるキリシタンの總數は約三萬人なるべく、日本全國に於てはキリシタンの數大に増力す。」と傳へ天正七年十一月二十七日(一、五七九、一二一、一五)付のカリヤの書簡には(註二二)「十萬人内外なるべし」とあり、日本西教史にも其れと同様の記事(註二三)のあること見れば三百萬人迄はとてもないが當時非常な勢で増加して居たことは事實である。漸次勢力をえて來たキリスト教に對する禁教の烽火は天正十五年(一、五八七)、當時九州に遠征中であつた秀吉によつて擧げられることになつた。先きに耶蘇會によつて占有せられた長崎等の土地をおさめて公領となし(註二四)、禁教の令を發したることである。松浦家文書によれば(註二五)

一、日本は神國たる所に切利支丹國より邪法を授け候義甚以不可然事

一、其國郡の者を近付門徒になし、神社佛閣をうち破ること前代未聞候、國郡在所奉行等給人に被下候義は當座事に候、天下より御法度相守、諸事可得其意候處下々として猥義曲事候事

一、伴天連共知慧の法以心ざし次第檀那を持候はんと被思召候處如右日域の佛法を相破候條、伴天連の儀日本_レの地には被爲置間敷候間今日より二十日の間に用意仕可歸國候、其内下々伴天連に不謂族申懸者在之は曲事_レたるべき事

一、黒船の義は商賣の事候間各別候之條年月を経諸事實買可仕事

一、自今以後佛の妨を不成輩は、商業の儀は不及申候、何にても吉利支丹固より往還不苦候條可得其意事

天正十五年六月十九日

とあつて、劈頭第一に天主教に對する政策を表明して、布教を禁づるのであつて、黒船の儀は商賣のことであるから何時迄も來て貰はねばならぬと結んで彼の通商政策を併せて明瞭にして居る。此布告によつて長崎在留の宣教師は勿論のこと、漸次全國に及んで此れが對策に苦心した事が日本西教史に物語られて居る(註二六)。秀吉は十五年に長崎等を耶蘇會の手から沒收して公領としたが、翌十六年になつて初めて代官をおくことにして、

長崎邊近年伴天連令知行分事御代官被仰付候間致取沙汰物成等可運上候也

天正十六年卯月二日

秀吉朱印

鍋島飛彈守殿へ

と令狀を交付し(註二七)、更に戸田、淺野の兩候をして長崎の取締令を次の如く發せしめて居る(註二八)。

定

一、當時御料所に被仰付上は非分の義有之間敷事

一、有様の御公物納可申上迄横沒不可有事附り地子共得上意可免之

一、當所の儀此兩人へ被仰出候間爲代官鍋島飛彈守に預置候何も可得其意事

南蠻貿易概觀

一、黒船の儀前々の如くたるへきの旨地下人馳走として當所へ可相付事

一、自然下として不謂義申懸る者有之共一切承引仕間敷事

右之旨相背輩於有之者急度兩人方へ申越堅く可申付者也仍如件

天正十六年五月十八日

戸田民部少輔

淺野彈正少弼

更に徳川時代になつてからも大體同様の方針を踏襲して、布教禁止の令を度々出し、天主教徒に迫害を加へる傍ら貿易に對しては極めて寛大な態度を持し、寧ろ進んで其振興をはかつたことさへ屢々ある。慶長十八年には宗門檀那請合の掟十五ヶ條を制定して邪宗を禁じ、更に伴天連追放文を草した事實が禁令考に見えて居る(註二九)、恐く此れが徳川幕府として法文にあらはした最初の禁令であつたことと思はれるが異説もある(註三〇)。元和二年(一、六一六)の禁止令によつて宗門改めが初められてから天主教徒に對する迫害が益々甚だしくなつて、終には貿易上の利益迄も犠牲にしなければならぬことになつて來た。それに關する法令の主なるものが三つあるが、之れを示して見ると次の如くである(註三一)。

(イ) 邦人渡航制限令

覺

一、異國え奉書船之外舟遣候儀堅停止之事

一、奉書船之外に日本人異國江遣申間敷候若忍候而乘まはり候もの於有之は其ものは死罪其船並船主共に留置言上可仕之事

一、異國え渡り住宅在之日本人來候は、死罪可申付候但不及是非仕合有之而異國に致逗留五年より内に罷歸候ものは遂穿鑿日本にとまり可申につきては御免併異國え又可立歸においては死罪可申付候事

一、伴天連宗旨有之所えは從兩人可申遣之事

一、伴天連祈人ほうびの事

附上之祈人には銀百枚それより下は其忠にしたがひ可相計事

一、異國船申分有之而江戸え言上之間番船之事如前々大村え可申越之事

一、伴天連宗旨弘候南蠻人其外惡名之もの有之時は如前々大村方之籠に可入置之事

一、伴天連之儀船中之改迄入念可申付事

一、諸品一所え買取申儀停止之事

一、奉公人於長崎異國船之荷物唐人前より直に買取候儀停止之事

一、異國船荷物之書立江戸え注進候而返事無之以前にも如前々商賣可申付事

一、異國船につみ來り候白糸直段を立候而不殘五ヶ所へ割符可仕之事

一、糸之外諸色之儀糸之直段極候而之上相對次第商賣可仕之事

附荷物代銀直段立候而之上可爲二十日切之事

一、異國船もとり候事九月二十日切たるべきこと、但遲來候船は着候而五十日切たるへきこと

一、異國船賣殘し之荷物預置候義も又預り候事も停止之事

一、五ヶ所之商人長崎え來着候儀七月二十日切たるへしそれより遅く參候者は割符をはつし可申事

一、薩摩平戸其外いつれ之浦に着候船も長崎の糸之直段之如くたるへし長崎にて直段立候はぬ以前商賣停止之事

右之條々可被可此旨もの也仍執達如件

寛永十年酉二月二十八日

伊 賀（内藤）

丹 後（稻葉）

信 濃（永井）

讃 岐（酒井）

大 炊（土井）

曾我又左衛門殿

今村傳四郎殿

(口)
邦人渡航禁止令

定

一、異國え日本之船遣候儀堅く停止之事

一、日本人異國え不可遣候條思ひ候に乗渡候者於有之者其身は死罪其船並船主とも留置可言上事

一、異國え渡り住宅仕日本人來候は、死罪可被申付事

一、切支丹宗旨之有之所は從兩人可被逐せんさく事

一、切支丹訴人褒美の事

伴天連之訴人は其事により或ひは三百枚或は二百枚たるべし其外は此以前のことく相斗可申付事

一、異國船申分有之而江戸え言上候之間番船之事此以前のことく大村へ可申越事

一、伴天連法弘候南蠻人其外惡名之者有之時は前々之如く大村之牢に可入事

一、伴天連之儀船中之改迄入念可申事

一、南蠻人子孫不殘置詳に堅く可申付事若令違背殘置族有之においては其者は死罪一類之者科之輕重により

可申付事

一、南蠻人長崎にて持候子併右之子供之内養子に仕族之父母等悉雖爲死罪身命を助け南蠻人え被遣候間自然

彼者共之内重而日本へ来る頃又は書通於有之者本人は勿論死罪親類以下迄隨科の輕重可申付事

一、諸色以下一所に買取候儀停止之事

一、武士之面々長崎におゐて異國船の荷物唐人前より直に買取候儀停止之事

一、異國の荷物書立江戸え注進賣買可申事

一、異國船に積來候白糸直段を立候而不殘五ヶ所其外書付之所割合可遣事

一、糸之外諸色之儀は糸の直段極候而の上相對次第商賣可仕但唐船は小船之事に候間見斗可申付事

附荷物之代物直段立候而の上可爲二十日切事

一、異國船戻りは九月二十日切若遲來船は着候而五十日切但唐船之見計加利宇多より少跡に出船可申事

一、異國船賣殘之荷物預ヶ置候も又預り候儀も停止之事

一、五ヶ所總代之者長崎參着可爲七月五日切夫より遅く參候者割符をはつし可申事

一、平戸へ付候船も長崎にて直段立候半以前に賣買停止之事

以上

寛永十三年五月十九日

加賀守(堀田)

豊後守(阿部)

伊豆守（松平）

讃岐守（酒井）

大炊頭（土井）

榊原飛彈守殿

馬場三郎右衛門殿

(ハ) 鎖國令

條々

一、日本國被成御制禁きりしたん宗門之儀乍存其趣弘彼法之者于今密々差渡之事

一、宗門之族結徒黨企邪義則御誅罪之事

一、伴天連同宗旨之者かくれ居る所へ彼國よりつゞけの物送あたふる事

右因茲自今以後かれうた渡海の儀被停止之事此上者若差渡においては破却其船併乘來者悉可處斬罪之旨所被仰出也

仍執達如件

寛永十六年七月五日

對馬守（安藤）

豊後守(阿部)

伊豆守(松平)

加賀守(堀田)

讃岐守(酒井)

大炊頭(土井)

掃部頭(井伊)

即ち右に掲げた禁令によつて明かにせられて居る様に、寛永十年(一、六三三)に奉書船以外の海外に出づることを嚴禁したが、まだ朱印船に對しては何等の制限を加へるまでにはなつてゐなかつた。十一年、十二年に續いて發せられたものにも何等變つた所が見出せない。然るに十三年(一、六三六)には前例を破つて奉書船と雖も海外に渡航することを嚴禁すると云ふことに成つたのであるから、邦人の海外發展の途は完全に封ぜられることに成つた譯である。然も外國に居住して居る日本人が若し歸國する様なことがあれば、悉く死罪にすると云ふのであるから餘程從來のものと變つて居る。更に國內に在留して居た南蠻人及其關係の者二百八十七人のものをマカヲに放逐して、一部の商人丈を出島に居住せしめて市内に散宿することを禁じて居る(註三二)。幕府はそれ丈では尙安心することが出来なかつた爲めに十五年の八月に太田備中守を特使として長崎へ遣はして、南蠻人の渡海することを嚴禁して、入港中の商船及出島在留の南蠻人一人残らず歸國すべきことを命ぜし

め同時に之を實行して居る。更に翌十六年七月（一、六三九、八）に井上筑後守を長崎に派遣して、其夏入港したポルトガル商船に貿易禁止の命令を傳へしめて、若し再び渡來する様なことがあれば船を沈めて乗組員全部を死刑に處する旨聲明せしめて居ることは前掲鎖國令に示された通りである。翌年五月十七日戸町浦口について、通商を乞ふポルトガル船を燒却して、船員七十四人の内六十一人を死罪に處し、残りを歸國せしめて、（註三三）此法令を實行した爲め、それ以後渡來しなくなつたやうである。

天主教が幕府の法令によつて禁ぜられて以來寛永二十年（一、六四三）迄三十年間に布教者の潛入を企てたものは、前後十三回約七十五人である。それを會別にすればゼスス會三十二人、フランシスコ會十八人、ドミニコ會十六人、オゴスチノ會九人であり、國籍に別ればイスパニヤ人三十人、日本人十七人、ポルトガル人十人、（この中に日本人との混生一人）、イタリヤ人十一人、フランス・フラマン・ポーランドが各一人、國籍不明の者二人（但し以上の計數中多少疑ひのある分も推定で分類した。最後の二人は日本人かとも思はれる）であるとの意味の事柄を姉崎博士が發表して居られる（註三四）。又千六百十七年（元和三年）頃にはゼスス會だけで三十四人の教師、その他の會で十五六人の教師が日本に來て居り、信徒の數も十萬以上あつたに違ひないと斷言せられて居る（註三五）。永祿十二年（一、五六七）以來寛永元年（一、六二四）末迄凡そ五十八年間に百六十六回の多きに互つて刑死せるもの算なき状態（註三六）と併せて考へれば如何に當時の布教が眞劍味を帯びて居り、信徒が眞面目であつたかを想像することが出来る。幕府の當局者が回を重ねて布教を禁じ、能ふ

かぎりの手段をめぐらせるにも拘らず、充分な効果を擧げることが出来なくて、終に一大英斷たる貿易禁止令を布告しなければならなくなつたのである。

天文十一年初めて我國に漂着して以來約百年の永き期間に互つて薩南の諸港、豊後の府内臼杵等より轉じて地勢上から見ても、經濟的に考へても有利な平戸、長崎を中心とし我國の文化開發上重大な意義を持つて居たポルトガル貿易も、主として宗教上の理由から漸次其の貿易上に制限を加へられることに成つた。寛永十三年には其年築造の完成した出島に移されて、僅かに三千九百六十九坪餘の面積内丈の自由しか與へられずに、嚴重な監督の下に貿易することに甘んじなければならなかつた。然も其制限貿易さへも前後二三回丈許されたのみで十五年、十六年の二ヶ年に渡つて以後貿易することを嚴禁する旨を達せられて、最後にのこされた出島とも別れて了はねばならなかつた。後二年にして出島に和蘭人が居住するやうに成つて日本に於る貿易權を奪はれたポルトガル人は、それと相前後して東洋各地の市場をも併せて和蘭人の手に奪われることに成つた。

(註一〇) Murdoch: Ibid p. p. 35—37.

(註一一) 日本西敎史 上卷 六七頁。

(註一二) 大村記 (史籍雜纂收錄)

一、永祿五年、横瀬浦之南蠻船入津、同十年迄來る、同十一年福田浦之入津、元龜元年長崎浦に入津と也とあり。
大村家秘錄にも同じ意味の記事がある。

(註一三) 菅沼貞風、平戸貿易誌 二七頁。

- (註一四) 日本西教史 上卷 二〇五頁。
- (註一五) 耶蘇會士日本通信 上卷 一〇頁 一一頁。
- (註一六) 日本西教史 上卷 二三〇頁 二三二頁。
- (註一七) 長崎拾芥集(續史籍集覽收錄)
- (註一八) 上卷 五一八頁。
- (註一九) 長崎と海外文化 上卷 二三頁。
- (註二〇) 海の大日本史 上卷 二〇三頁。
- (註二一) 耶蘇會士日本通信 下卷 九二頁 二二三頁。
- (註二二) 同 四七六頁。
- (註二三) 上卷 四八〇頁。
- (註二四) 長崎略史 上卷 五頁。
- (註二五) 菅沼貞風、前掲書 三八頁 三九頁。
- (註二七) 長崎略史 上卷 五頁
- (註二八) 菅沼貞風、大日本商業史 三二四頁。
- (註二九) 徳川禁令考、第六帙、第四十一章、慶長十八癸丑年五月邪宗門吟味之事の項 一二〇頁 一三〇頁。
- (註三〇) 長沼賢海、宗旨人別改めの發達 一六頁(史學雜誌四〇ノ一一)
- (註三一) 徳川禁令考、第六帙、第六十七章、内外制禁條目 自五六五頁 至五七一頁。
- (註三二) 長崎略史 上卷 三一頁。

(註三三) 異國往來略譜 卷三 二枚、三枚。

(註三四) 姉崎正治、切支丹教師の日本潜入(下) 八五頁 八六頁(史學雜誌四〇ノ六)

(註三五) 同 人、日本切支丹とロマ教皇との交通——バルベリニ文書の署名者とその運命——(史學雜誌三九ノ二)

(註三六) 日本鮮血遺書 自四三九頁 至五二三頁。
聖人

四

ポルトガル人に次いで我國の市場にあらわれたのはスペイン人であつたが、當時のスペインはポルトガルと相並んで海外發展史上に重要な地位を占めて居た。此二大海軍國は千四百九十四年(明應三年)の條約によつて植民地分界線を北緯四十度から五十度の間に定めて洋を東西に二分して(註三七)、スペインはネザーランド(Netherland)、ナポリ Naples、ミラノ Milano、シシリイ Sicily、サルヂニヤ Sardinia 等の歐州諸國を初め、加州、メキシコ Mexico、キューバ Cuba より中米に及び、更に南米ギアナ Guiana、ペル Peru、チリ Chili、リヲ・デ・ラ・プラタ Rio de la Plata 等の南米諸洲に併吞して、千五百二十一年(大永元年)には東洋に進出してフィリッピン郡島を併せて、強大な海上權を掌握することに成つた(註三八)。フィリッピン進出後はルソンを根據地としてメキシコ貿易を營み、更に轉じて我國と貿易を開く様になつた。

天文十八年(一、五四九)に豊前國八ツ屋浦に着岸した商船が其最初のものであつて(註三九)、其後永祿七

年（一、五六四）肥前の五島へ、同十年（一、五六七）肥後の天草郡南濱へ、翌十一年紀伊の雜賀浦等に着岸して貿易したこともあつたが、天正八年（一、五八〇）以來は平戸を其貿易港と定めることに成つた。ポルトガル人が大村領へ移つた爲め對歐貿易の衰へたときであつたから、領主松浦氏との關係も極めて圓滑に進んで、其後約二十年間は此港を中心に貿易を營んで居た。慶長四年（一、五九九）頃になると和蘭と云ふ競争相手があるので、商業上の利潤を思ふ様にとられなくなつて、對西貿易も終に杜絶する様になつたと菅沼氏は述べて居られる（註四〇）。

天正十八年（一、五九〇）になつて秀吉は原田孫七郎のすゝむるまゝに、比島經綸を計畫して、九月十五日付の書面を總督ゴメス・ペレス Gomez Perez に送くることに成つた。其内容は朝鮮及び大明遠征に對して援兵を送れ。若し承諾せぬ様であれば軍兵を差向けて比島をとつて了ふと云ふ意味のものであつた。此問題について双方の使節が數回往復した様であるけれども要領をえない中に秀吉が死んだ爲めに結局有耶無耶に成つて了つた様である（註四一）。

同じく秀吉時代のことであるが、ドン・フランシスコ・テル Don Francisco Tell の比島總督に就任した千五百九十六年（慶長元年）に、メキシコに行く爲めにルソンを出たスペイン貿易船二艘が途中で遭難したことがあつた。其の中のサン・フィリップ the San Philip 號は長崎を避難港に定めて航海を續けたが、漂流して針路を誤つた爲めに土佐の浦戸に着いて了つた。それは慶長元年十一月十七日の出來事である。國主であつた長曾我部元親

が此旨を大阪に傳へたので、増田右工門尉長盛が派遣せられることになつたが、長盛は積荷全部を公收して乗組員四十餘人全部を大阪へ引致して了つた(註四二)。此時の積荷は繻子五萬端を初め金欄緞子五萬端、唐木綿二十五萬反、白糸十六萬斤等が主なものであつて、鸚鵡・麝香・金欄緞子二反を禁中に獻し、更に攝家・清華・諸侯伯・士大夫に頒ち與へたと云ふことである(註四三)。此事件を機會にして近畿に散在して布教に従事して居た主なるものを合せて二十六人を逮捕して、翌二年長崎で斬刑に處し(註四四)、船員には小船を與へてマニラに歸ることを許して結末を告げた様である(註四五)。

徳川氏が政權を掌握する様に成つてからも、比島を通じてのスペイン關係は相當永く經續せられた様であつて、菅沼氏の様に慶長四年をもつて西國關係は杜絶したと見ることは如何なものであらふか。モルガの書中には家康がスペイン船を關東地方に迎へ浦賀を開港して貿易を開く希望を有し、南部の諸港のみに入港する貿易船を誘はんとしたことが述べられて居る(註四六)。大日本史料には數ヶ所に互つて家康及秀忠と比島總督との間に文書並に進物の贈答の行はれたことが記載せられて居る。今其の内の主なるものを引用して當時のスペイン關係を明かにしたいと思ふ。

先づ慶長九年(一、六〇四)の閏八月にルソン總督ドン・ペドロ・デ・アクーニャ Don Pedro de acuna からキリスト教の布教を許して貰ひたいとの書面を送つて來たので、家康は此使者を伏見で引見したことがある(註四七)。翌十年にはスペイン人の希望に従つて、

去夏芳札并音信物、如注文到來、懇志に候、其方任所望、商買船者、年中四艘渡海候、從是鞍寄口、皆具、鑓拾本遣之表寸志候、不宣、

慶長十年九月十三日

御 朱 印

との書を與へて毎歲商船四艘の通航することを認めて居る(註四八)。翌年正月にルソンの商船が薩摩に來航して破損したことがあり(註四九)、同年九月十五日に、家康がルソンの使者に鎧四領及六具を托して總督に贈つたことがあるが、其書面の中に、「來翰披閱、黑船一艘渡海、」との記事が見えて居る(註五〇)。

家康は更に積極的に、スペイン貿易を關東に導く爲めに度々呂宋總督と交渉した様であるが、それが爲めに浦賀を其交易市場に選んで、

定

三浦之内浦賀津

對呂宋商船、狼藉之儀、堅被停止之訖、若於違背之輩者、速可處嚴科之旨、依仰下知如件

慶長十三年七月 日

對馬守(安藤)

大炊助(土井)

なる高札迄掲げしめて、スペイン貿易に力を入れたことがあつた(註五一)。千六百八年(慶長十三年)の五月二十七日付で、ルソン總督ドン・ロドリゴ・デ・ビベロ Don Rodrigo de Vivero から家康、秀忠、に書簡並に方物を贈つて來たので、それに對して各々復書を托して居るが、秀忠の復書には、

「黒船壹艘、海上無其煩、得順風而不日到着于相州浦川津、至祝至泰、吾邦風俗以直爲心、若有不直者則戒之刑之、以故市易相懷、公平之外無他、莫勞思慮、先年之來船、亦海路風靜、而歸着於本邦之示諭、珍々々々、云々」

とあり、家康の復書中に、

「如書面從伊須波二屋、爲呂宋國守護渡海、珍重至祝、如前々不可有疎意、然而今歲、被着船於相州浦川津、欣悅不淺、抑如貴國者、上下安寧、云々」

とある所(註五二)を見ればスペイン關係は徳川時代に入つてからも尙持續せられて居たことは明かである。

更に翌慶長十四年十月二日に、スペインの商船長を駿府に引見して、ルソン總督ジュアン・エスケラ Juan Esqueria の書面並に方物をうけて、それに對して復書を與之、更に、

「呂宋船のひすはんやへ渡海之時分、逢逆風著何之湊共、相違有間敷者也、仍如件」

との朱印狀を六日付で與へた事實があり(註五三)、其船は松浦に着岸したものだとのことであるから、スペイン貿易は當時矢張り平戸で行はれて居たもので(註五四)、浦賀へは壹回位來たことがあるかも知れないけれど

も(註五五)、當時の交通状態から考へて高札を立てなければならぬ必要はなかつたであらふ。慶長十七年(一、六一二)にルソン總督並にカステイラ Castilla 國王ドン・フィリツパス Don Philipus から書面及方物を贈られた家康及秀忠は答書及進物を托すると同時にノヒスハンヤとルソン宛の朱印狀各一通を七月一日付で渡したことがある(註五六)。

右の如く殆んど毎年ルソンより使者の派遣せられてゐる事實から考へて見て、それ等の使者が總督なり國王の親書と方物丈を贈る爲めに特派せられたものだとは信じ難い譯であつて、黒船が來たり、朱印が與へられた事を参照すれば、他に何等の資料がないとしても通商關係が依然として持續せられて居たと斷定してよいと思ふ。切支丹大名記に(註五七)、

「イスパニヤと日本との商業も亦、それから少し後に廢止された。副王並びにマニラの大司教の嚴禁があつたにも拘らず、フィリツピンから宣教師が絶えず到着する爲に、將軍はひどく氣嫌を損じて、遂にイスパニヤ人との關係を全く斷つ決心をした。これが爲に、彼は一、六二三年(元和九年)フィリツプ四世の即位を報ぜんが爲に渡來した大使を引見しようともせなかつた。彼は激怒のあまり、イスパニヤ人との通商は、日本に利益を齎らさないばかりでなく、寧ろその邪教によつて日本を穢すばかりであると彼等に言はしめた」と書かれて居る所を見ると通商關係の杜絶したのは元和以降であることが分つて來る。元和九年以降は、少くとも、ルソンより舟を出して我國で貿易したことは絶へて了つたことであらふ。然しながら、スペイン貿易が

その頃まで経續せられて居たとしても、スペインの商人達は先きにポルトガル人に壓倒せられ、ポルトガルを其屬國とした（一、五八〇）後に於ても、フランダ・イギリス等の諸國人と競争しなければならぬ立場におかれて居たのであるから、實際上の貿易は極度の制限を受けたものに違ひない。當時は邦人の海外雄飛時代であつたから、邦人が進んでルソンに出かけて貿易したことは渡海禁止令の出た頃まで續けられたことは勿論であつて、此意味に於けるスペイン關係は、尙十數年の間持續せられた譯である。（未完）

- (註三七) Morga: History of the Philippine Islands.
(Sucesos De las Islas Filipinas) p. 42.
- (註三八) Webster: Ibid p. 123.
- (註三九) 長崎記、七六枚「南蠻船日本に來ること」の項。
- (註四〇) 菅沼貞風、平戸貿易志 自四一頁 至四三頁。
- (註四一) Morga: Ibid p. 67.
- (註四二) 日本西教史 下卷 自六〇八頁 至六四二頁。
- (註四三) 海の大日本史 上卷 一九二頁。
- (註四四) 日本鮮血遺書 自二九頁 至八九頁。
Morga: Ibid p. p. 116—127.
- (註四五) Morga: Ibid p. p. 116—127.
- (註四六) p. 248.
- (註四七) 大日本史料 十二之二 自五九二頁 至五九四頁。
- (註四八) 大日本史料 十二之三 自四五四頁 至四六〇頁。
- (註四九) 大日本史料 自九〇〇頁 至九〇四頁。
- (註五〇) 大日本史料 十二之四 自三五〇頁 至三五二頁。
- (註五一) 大日本史料 十二之五 六九九頁。
- (註五二) 大日本史料 自七〇四頁 至七一〇頁。
- (註五三) 大日本史料 十二之六 自六九二頁 至六九三頁。
- (註五四) Münsterberg: Auswärtiger Handel mit Japan S. 43.
- (註五五) 大日本史料 十二之九 九八〇頁。
- (註五七) 大日本史料 自九五九頁 至九八一頁、及び大日本史料 十二之十 自一一〇頁 至一二九頁。
シュタイシェン著、切支丹大名記 三九九頁。
吉田小五郎譯、